

Story of PES

自然と共に生きる

環境男・いしぐろ たかとし

戦中における環境の原体験

夜空はいつも、自分の世界に広がっていた。

冬の空、頭上の高くまたたいて、小さく光り、七つを数える星のかたまりは「すばる」と呼ばれると知って、お習字の塾の帰りは、寒さを忘れて、静けさの中を、空を見上げて、ゆっくり歩く足音が、耳に心地良く響いていた。

夏の夜は、家の二階の瓦屋根の上に父が作った物干し台のコンクリートの床に、ふとんを広げて、兄弟四人、寝転がって、空を眺め、年下の、妹、弟達に、北十字星として知られる白鳥座につながる彗星、織姫の話聞かせて、涼みを運ぶかすかな風の動きを心待ちしていた。

そのいずれもが、圧倒的な存在感で幼い記憶の中にあるが、その後30数年後にオーストラリアで出会った南十字星は、何かぼんやりとして印象に乏しく、むしろ、漆黒の中、声をあげて、海から陸に上がってくる、ペンギンの姿が強く、臉に残っている。

いつも自然の懐に抱かれている安心感は、台風時の暴れる風雨にすら、近づいて、通り過ぎるまでの間を、恐ろしさを忘れ、時の刻みで感じさせながら、それを、待つことに替えてくれた。

戦時中、街に響く、サイレンは、「警戒警報」か

ら「空襲警報」と音色は、けたたましく変わっても、恐怖がいや増しになることなく、防空壕の壁に背をもたれさせて、B29の爆撃機の爆音を確認しながら、それが通り過ぎるのを待つ心は、嵐と出会った時の気持ちに通じるものであった。

斯様な幼児体験は、戦時には軍需工場として有意義な働きを果たした建物が、小学校として変身する過程での、破壊から再生へのあらゆる試みは、人間の努力と共に、自然への敬意の中でのみ実現することを味わう喜びに繋がっていった。

人間生存を支配する全ては「環境」と言う言葉に置き換えてみると、「地球の上に存在を許されている」「有機物、無機物もその『環境』の中で、差別なく共存している」という含蓄の深い意味を持つ。

腰の後ろに両手を組んで、畝を横に移り動く麦ふみに、西に傾く夕陽は限りなく美しい。

伸びた麦の穂の陰に舞い降りるひばりを追いかけて、土中を走るモグラの穴に手を添えて親しむ。並んでする田植えは、掛け声に唱和して、曲がった腰を伸ばすを忘れ、昼餉の時にたどり着く。田の草とりは、足にまとわるヒルに手をやくも、血染めの友をいたわるごとく別れを告げる。